［その他］

体育学部紀要の存続価値を巡る私見

武田　大輔*1

The personal opinion on the continuation of publication of the Bulletin of the School of Physical Education.

by

Daisuke Takeda

Abstract

The purpose of this paper is to present my personal opinion by looking back on the five years I was involved in the research committee and my own recent situation as an opportunity to reconsider the new value of the School of the Faculty of Physical Education. I argued that there is value in allowing free submissions that go beyond the scope of general academic papers, in connecting faculty members who belong to the university, and in bequeathing the living testimony of the faculty members themselves.

Ⅰ．はじめに

大学の運営方針の転換に伴い，学部紀要の出版に関する基本的な考え方を再検討することが各学部において求められている.筆者の聞く限りでは，大学としての考えは，それぞれの研究者の研究領域や分野における主要なジャーナルへの積極的な投稿を推奨していることにある．したがって，紀要に関わる予算を含めて，各学部における紀要の位置づけを明確にする必要が生じてくる．この作業は，基本的には単年度で構成される研究委員会による議論を経て，その原案が教授会にて審議されるのが通常であろう．しかし，人的にも時間的にも限りある委員会活動だけの原案でよいのだろうか．委員会の枠を超えて，各教員がそれぞれに紀要の持つ意味を改めて考える時間を持ってもよいのではないか．それは，各教員の日頃の活動を振り返る機会ともなろう．以上のように，大学運営に関わる背景と,個人的な考えとが動機となり，本稿を執筆することとした．体育学部においては学部紀要を発行する意義をどのように考えるのか,つまりその存続価値を議論する契機を提示することが本稿の目的である.

Ⅱ．学部紀要の独自性と可能性

1．研究委員会での紀要出版担当の経験から

筆者は2016年の本学入職時から現在までの約5年間において研究委員会委員を拝命し，主に紀要の出版に関わる業務に関わらせていただいている.そもそも煩雑な作業のある紀要作成であるが，電子化への移行,予算削減による教員の作業増など,その煩雑さと業務負担は年々厳しくなっていると感じる．ネガティブな言及はほどほどにし，これ

＊1　東海大学体育学部生涯スポーツ学科

までに紀要に関わる業務を通じて筆者が感じたことを記載する．

最初に紹介したい印象深いことは，植田恭史教授による一連の玉稿「私の考えるコーチング論」である．2019 年度はⅨとあり，その積み重ねを想像できる．単なるハウツー的な指導書ではなく，指導者としての姿勢や生き方までが伝わってくる内容である[註 1)]．植田教授が素晴らしい指導者であることは，筆者がわざわざ説明しなくとも周知のことである．筆者が東海大学に赴任しすぐに感じたことは，ここには素晴らしい指導者が多くいるということだ．その理由は簡単で，他大学と比べて充実しているとは決していえない施設環境において，多くの運動部が高い競技レベルにあるからだ．そしてそれは本学における指導者や学生アスリートの創意工夫があってのことであろうと想像した．そのため，本学の指導者らの体験知を活字として遺すことには多くの意義や価値があると考える．

ところが，その論述を拝読しているときに，僭越ながら，時折違和感を感じたのである．戸惑いであったのかもしれない．その時はその理由がわからなかった．その後，植田教授の論文だけでなく，ほかにも多くの実践に基づいた資料を論文化する論稿がいくつか投稿され，一部は審査を経て，またある一部は研究委員会による精査を経て出版に到るのだが，残念ながらすべてが掲載されることはなかった．それらひとつひとつの詳細についてはここでは触れないが，筆者が感じたことは，この紀要自体がいわゆる狭義の科学観あるいは学術論文の一般的概念や体裁に縛られているのではないかということである．大胆に言えば，著者の主張を支える客観的な裏付けがなければ学術論文ではないという偏った価値観である．ここでの客観性は，数値に代表されるように可視化され，再現可能なものといった狭義の意味である．たとえば，植田教授の論述の中にも，ご自身の主張を支えるような他者の研究を引用しているのだが，引用元の内容とご自身の主張とがやや離れていると感じることがあった．その引用がなければ，より力強い主張となったはずだと感じるのである．もちろんすべての教員の学術論文に対する考え方を尋ねたわけではないので，あくまでも筆者による想像を基にした指摘である．

ところで筆者自身はというと，現在における科学観に縛られ，自身の心理サポート実践やそれに基づく研究の表現に苦悩している．それは本紀要 50 号において別に提出した．コーチング領域だけでなく，体育やスポーツ，健康運動などを包含する体育学に身を置く者[註 2)]の多くは，それぞれのフィールドで他者との交流を生身でもって体験し，それを自身の経験としているであろう．あるいは他者との交流だけでなく，大地，水，空気といった自然とも生身で関わっている．意識と体の相互的関わりの強い体育人においては，その体験の言語化は容易でないと想像する．無理矢理に研究の俎上に落とし込もうとして安易な操作化を施した実証研究は，しばしばリアリティとの距離を作るだろう．その距離は，研究者と現場（指導者や運動実践者など）との距離とも置き換わる．それでも専門用語で構成された概念遊びは高尚なやり取りに見えるため，専門家でなければ，高度な研究が行われていると認識されるだろう．

話が逸れる前に本旨に戻る．コーチングの妙やコーチングの本質といった体験そのものの言語化は困難ではあるが，そうは言っても，何らか活字にしていくことは大学人の使命である．その活字化に狭義の科学観が邪魔をしているなら，それに依らない表現が許される表現媒体があっても良いのではなかろうか．体育学部紀要によって実現できると考える．繰り返すが，体育学部教員のあらゆる実践の記録は学術的にも貴重である．

2．原著論文とは

原著論文とは何かを改めて考えることが，最近の個人的出来事の中であった．筆者の考える原著論文とはオリジナリティに富む研究の発想やそれによる知見の提示がなされたものと考えていた．たとえば，「（ある現象に対して）みかんを用いて明らかにした研究は見られるが，りんごで行った研究は見あたらない．だから意義がある．」といった類いは，対象を変えて行っただけであり，真の独自性とは言えないと考えていた．パラダイムシフトが起こるような結果を提示することは夢のよ

うな話だが，少なくとも各研究領域のメジャーとされるジャーナルに原著として採択されることを研究者は目指していると想像する．ただしそれは容易でないとも考える．数年にわたる研究の積み重ねの先に，独自性のある論文，すなわち原著論文があると筆者は考えていたからである[註3)]．ところが，改めて原著論文の定義はと尋ねられても，明確には答えられないと思い直したのである．たとえば，いくつかのジャーナルの投稿規定等を確認してみる．筆者の領域に近いところから，日本体育学研究，日本スポーツ心理学研究，東海大学紀要体育学部を取り上げ，それぞれの定義を引用する[註4)]．

体育学研究：原著論文は，科学論文としての内容と体裁を整えているもので，新たな科学的な知見をもたらすものであることが必要です．ただし，人文系と自然系の論文構成には違いがありますので，論文の構成や見出しはそれぞれの研究領域に応じて適切なものを用いてください．

スポーツ心理学研究：原著論文は，新しい知見を含む実証的または理論的な論文である．

本学部紀要：原著論文とは，科学論文としての内容と体裁を整えているもので，未発表の資料に基づき新たな科学的な知見をもたらすもの．

以上のように，定義はされているものの，曖昧なところが多い．本学部紀要の原著に注目すると「科学論文としての内容と体裁」，「科学的知見をもたらす」のように“科学”への重み付けがあるようだ．それでは，科学とは何かを考える必要がある．しかしながら，現状としては本学部教員によってこれらを真剣に議論する時間的余裕はなく，査読を必要とする原著論文については，査読を担当する教員の科学観，原著に対する考え方に頼らざるを得ないのである．

本稿は科学論を述べることが趣旨ではない．本学部紀要を存続させる意義や，本学部における原著論文とはどのようなものが相応しいのかを考える契機を提示することである．予算の削減が大学の決定となり，本学部紀要の発刊についても研究委員会で話題となった．紀要の根幹だけでなく，出版までの詳細などをすべて決定するまでにはいかなかったが，しばらくは学部の人的および財的資源でもってできる範囲で継続することが確認された．学部としての紀要をどのように位置づけるかは今後の課題とした．この時に発せられた阿部悟郎副委員長（体育学科教授）のパーソナルコメントは紀要の存続意義を考える上で重要であると思われた[註5)]．発言の内容はおおよそ次に示すとおりである．「各専門領域における学術雑誌への論文採択には，その時代の潮流にあったものとなってしまうこともある．学術的産物には後生で評価されることもある．そのような論文を大切にする上でも，紀要は存続すべきである」．主要雑誌ではリジェクトされたので紀要に投稿するといった消極的理由でなく，将来的に価値ある論文へと繋がるために，内容の多様性や自由度を認める紀要となることが望まれる．一方で，学術団体で設置されている編集委員会と同じ機能を有する本学部研究委員会であるが，この「体育学部研究委員会の編集のもと，東海大学体育学部によって紀要は発行されるため，学外の識者に評価されることも意識しなければならない．社会的責任がある」．これは同じく研究委員会委員の内山秀一教授（体育学科）によるパーソナルコメントであり，重要な指摘である．いわば自由と規律のようなものであろう．最低限の体裁を持ちながらも，現代における科学論文の範疇を超えた論文が提出されても良いのではないだろうか．その価値は多様に評価されてよい．そのために，これを機に投稿規定についても取り上げ，いずれの原稿の内容もそれぞれに特徴を持つ価値あるものとして整理する議論を待ちたい．ちなみに，筆者は本稿を「その他」の内容（原稿の種類）として提出しているのだが，投稿規定にその原稿内容は記載されていない．投稿の申し込みに用いる投稿原稿添付票には，原稿の種別として，査読を希望しない「その他」があり，審査を希望する領域にも「その他」があるのだ．前任者からの引き継ぎ資料からなので，おそらく2016年以前からこのようになっていたのだと

想像される．細かな規定にこだわらず，あるいは気づかずにいたことで，ここまでにもこの「その他」で書かれた論稿もある．今更規定に沿っていないからとの理由で取り下げるのは，愚の骨頂である．そのままにしておいてよいと思う．今後の議論において，整理されることを待ちたいが，社会的責任と自由度を担保することを考慮されたい．

3．誰のために書くのか

若手研究者なら大学機関への就職のため，現職教員であれば業績評価のため，といった理由もあろう．しかし，それだけでない理由が当然ある．

私的な話を紹介したい．筆者のゼミ生のことである．彼女は卒業論文を提出した後に，後輩のゼミ生に次のようなことを述べた．それは「*卒業論文作成においてたくさんの学術書を読みました．学術書を読むというのは，人との出会いであると感じました．著者の主張を読んで，なぜこの著者はこのように主張するのかを考えるようになりました．それは著者の人柄に触れるようなことでした．だから，学術書を読むということは人との出会いなんだということを学びました．(2019年度卒業　生涯スポーツ学科　黒岩莉咲子)*」である．“体育学部教員は団結力がある”，“仲が良くていいですね”といった言葉を聞くことがある．たしかにそのようなところはあるだろう．しかし，それぞれの教員がどのようなことに関心を持ち，どのような価値観を有しているのかといった専門領域の肩書き名称からは見えない学術的な営みにおける人柄に触れることは，実のところはさほど多くないのではなかろうか．委員会の業務，共に行う授業，あるいは今は積極的にできない飲み会などのコミュニケーションとは異なる水準での関わりといったものがあるだろう．それが学部紀要の役割であっても良いと考える．つまり，同じ職場で働く仲間の人柄に触れる機会としての意味も紀要にはあるのではないか．

他者への方向性を述べたが，同じく自分自身への方向性としてはどうだろうか．すなわち自分のために書く動機を保障する場としての紀要である．筆者がこの50号に私見を記した一番の動機は，自分のためであった．本号の別の論稿において，心理サポート実践と研究との往還における筆者自身の苦悩を記した．そこでは，なかなか言語化にたどり着けないもどかしさを訴えた．そのような心境の中，あるとき小説家村上春樹を題材とした書籍[1)]を読んでいた．そこには村上氏の小説を執筆するきっかけが記されていた．「・・・才能や能力があるにせよないにせよ，とにかく自分のために何かを書いてみたいと・・・」．この一節に触れたときに，自分自身がざわつくような感じを覚えたのである．またこの時に，若い頃の心理臨床の訓練でのことを思い出した．それは，病院臨床において，多くの老人がカウンセラーに自身の生涯の物語を聴いてもらうことで，生のエネルギーが満ちてくることであった．自己の生きた証が遺ることの偉大さを思い出したのである．学術論文として相応しいのかどうかも大切だが，それ以上に自分のために書きたい自分がいることに気づいたのだ．ここまでで理解されると思うが，何かに縛られて息苦しくしていたのは筆者自身だったのである．教員としての業務の種類と量が過多となっている今日ではあるが，その中でも特にエネルギーを注ぎ大切にしている生業を，大学人として何らかの形で遺したいと思う教員がいるかもしれない．それぞれがここに生きていることを遺すような紀要であってもよいと願うのはお門違いだろうか．尋ねてみたいところである．

Ⅲ．おわりに

2020 年度体育学部紀要は，節目となる 50 号である．単なる節目でなく半世紀という重みある数字であり，しかも本来なら東京オリンピック・パラリンピックが開催されたはずの年でもあった．体育学部として特別な号となったかもしれない．ところが実際には，新型コロナウイルスによるさまざまな生活習慣や働き方に変化が求められ，多くの人々がそれへの適応に相当のエネルギーが使われたと思う．大学人も同じである．そうは言っても，もう少し 50 号発刊へ向けて何か発信できなかったのかと反省する．

冒頭に述べたように，各教員が紀要の位置づけを考えてよいと思う．それは，それぞれに多忙な業務に追われる中，その仕事ひとつひとつのプロ

セスには次世代に遺すべく大切なものが含まれており，それを言語的表現において達成できる媒体が紀要であると考えるからである.そのためには，教員各自によって紀要の位置づけを考えることが必要であろう．また，その思考がそれぞれの仕事をアウトプットする積極的かつ主体的な機会となれば幸いである．広く世の中に評価される論文だけが価値あるものではないと思う．同時代に，同場所で，活動を共にした同志との関わりが，次世代に何らかをもたらすことにも価値を置いてもよいのかと思う．そしてそれは，自分自身を遺すことでもある．以上が，筆者の紀要に対する価値観である．さまざまな考えが出てくることを期待したい.

註

註 1）本稿においては，植田教授のすべての玉稿を引用リストには載せていないが，これまでの体育学部紀要を手にすればその詳細は把握できる.

註 2） ときおり体育人や体育会系の人と括られるが，その意味や是非はここでは問わない.

註 3）この考えは，筆者自身の受けてきた大学院教育環境から感じたものである．しかし思い起こせば，恩師が「各大学の紀要でも優れた論文に出会うこともある」ともおっしゃっていた．筆者はそれをずいぶんと忘れていたのである.

註 4） 現在においては，多くの学術団体がウェブサイトを有しており，誰でも簡単にアクセスできる．サイトには投稿論文に関する規定や手引きが紹介されている．本稿では URL までを記載することはしないが，筆者は本紀要の発行時期の直近に確認した.

註 5） 阿部教授による，あるいは後述する内山教授によるパーソナルコメントは，あくまでも筆者が感じ取った内容である．ここに紹介したのは筆者であり，この意見に対する異論は筆者に対して提示されたい.

引用文献

1）山愛見（2019）村上春樹，方法としての小説．新曜社．pp.21-22.

謝辞

本稿に個人名を記載することを許可してくださった植田教授，内山教授，阿部教授，および卒業生の黒岩莉咲子氏に心より感謝いたします．なお，植田教授に確認をした際には，1 年 1 篇を目標に執筆され，書くことの喜びや世に出ることの誇りを感じられたこと，そしてそれをもたらした体育学部紀要への感謝のお言葉をいただきました．ここに付しておきます.